

Title	土左日記の読み方
Author(s)	山脇,毅
Citation	語文. 1952, 6, p. 25-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

土左日記の読み方

読み方といふのは、ある詞を音読するか、訓読するか、清んで読

ふ、解釈上のことである。

むか、濁って読むか、上につけて読むか、下につけて読むかとい

橋純一氏、小室由三氏、池田亀鑑博士、中村多麻氏、山田孝維博士され、同時に近衞家本も校合の形で示された。この間に白石勉氏、本の複刻が刊行され、同二十四年に図書寮本が一層正しい形で刊行され、同九年に三条西家本の複製が刊行され、同十六年に青谿書屋され、昭和三年にその複製が刊行され、同七年に図書寮本の本文が示土左日記は、大正十四 年に 前田家 の定家自筆本が活版で္刻さ

説のある点を拾ひ上げて、些か私見を加へたものである。れたのである。本稿はこの本文によって、読み方について、古来異全に再建せられて、本文に関する古来の数多き疑問は、大体一掃さら批判的処置に関する研究」の大著によって、貫之自筆本はほゞ完等の研究が発表され、特に池田博士の昭和十六年二月刊行の「古典橋純一氏、小室由三氏、池田亀鑑博士、中村多麻氏、山田孝雄博士

わらはまで、ゑひしれて、一文字をだにし らぬ もの しが あし講師、むまのはなむけしに、いでませり、ありとあるかみしも

山脇

毅

は昭和十六年八月の国語と国文学で、古来の註釈を概観して、とある中で、「ものしか」の読み方について数説がある。原田清氏は、十文字にふみてぞあそぶ」(十二月廿四日)

「し」を強意の助詞と見て「ものが」の意にとるもの

Α

「し」を「ら」の誤読誤写と見るもの

「か」を「も」の誤読誤写と見るもの

СВ

て考へたもの、猪熊浅鷲氏と折口信夫氏とにこの説があるD 「もの」と「しか」とを切離して「しがあし」と下につゞけ

て考へたもの、猪熊浅麿氏と折口信夫氏とにこの説があるて考へたもの、猪熊浅麿氏と折口信夫氏とにこの説がある、岸本由豆流の考証には「考ふるに、けふしまれ、けふしこそなどいふし文字と同じくて助字にもやあらん」といひ、香川景樹の創見には「ものがといふに、し文字をくはへて、語勢をつよめたる、どいふし文字と同じくて助字にもやあらん」といひ、香川景樹の創りには、南頭にならない。 A は今日までの註釈書 に最も多い説であの四説に要約せられた。 A は今日までの註釈書 に最も多い説である。 F 本語の別には見るない。 A は今日までの註釈書に最も多い説である。 H にはでいませい。 B にはいるのは、昭和四の記念にある。 A はいるには、 B にはいる。 B と C にはいる。 B と C にはいる。 B と C にはいる。 B と C にはいる。 B にはいる。 B と C にはいる。 B と C にはいる。 B にはいるいる。 B にはいる。 B にはいるいる。 B にはいる。 B にはいる。 B にはいる。 B にはいる

ものしがのがは、旧説通りとすれば、ものらがでなくては通らな年発行の国文註釈叢書の土佐日記考証の補註に

と出てゐるのが、それであらう。誤植もあるやちだが、私には意味代名詞風な用ゐ方から、ながらに近い意味にかつってゐるところだから、どうしても、のである筈だ。けれど、全々立 場を かへて、ものとしがとを切って考へると、〈善次郎案〉そがに通ずるしがと、とることが出来る。 やゝ古風な感じである。 この辺では、それ自身のと云ふ位である。但し、…………しらぬものをうは、それ自身のと云ふ位である。但し、…………しらぬものをうけるつゞきが並通でない。必ず、一文字以下、十文字云々までのけるつゞきが並通でない。必ず、一文字以下、十文字云々までのけるつゞきが並通でない。必ずとい意味にかつない。

が十分分らない。原田氏自身はD説を支持して、大略、

「しが」は「そが」の通音で、「其の者が」の意である。奈良朝「しが」は「そが」の通音で、「其の者が」の意である。 奈良朝「しが」は「そが」の通音で、「其の者が」の意である。だから「御自分の」といふアイロニカルな嘲声も知らぬ者が、さすがに学識高い住職殿にあやかってか、御自分の足では、ちやんと十といふ字を書いて、千鳥足に躍り狂ふのもいいといふ意味である。土佐日記の場合も「その手には一といふ字も知らぬ者が、さすがに学識高い住職殿にあやかってか、御自分の足では、ちやんと十といふ字を書いて、千鳥足に躍り狂ふのもの一般的意味から、侮蔑的嘲弄的な三人称所有格に局小されて使れれたやらである。だから「御自分の」といふアイロニカルな嘲はれたやうである。だから「御自分の」といふアイロニカルな嘲はれたやうである。だから「御自分の」といふアイロニカルな嘲にしが」は「そが」の通音で、「其の者が」の意である。奈良朝「しが」は「そが」の通音で、「其の者が」の意である。奈良朝にいか」は「そが」の通音で、「其の者が」の意である。奈良朝にいが、ないではない。

字ヲ蹈ミ出シテ即、千鳥足デ狂ヒ遊ブ状ハオカシィ事デアリマシ字ヲ蹈ミ出シテ即、千鳥足デ狂ヒ遊ブ状ハオカシィ事デアリマシで子大字字に知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶとし、「ものしがハ中村義象主ノ説ニ同意シテ本文ノ如クセリ、一手デハーノ字スヲ書キ得ナイト云フ者共ノ其レヲガコテとでした。

語ならんには、加ふるに及ぶまじ。のしを休め詞など称して、意なき天爾波とせるは誤なり。不用ののしを休め詞など称して、意なき天爾波とせるは誤なり。不用のしを添ふるは其の必用ありて、語勢を強めんためなるに、従来此しを添ふるは其の必用ありて、高熱を強めんためなるに、従来此ものしがのしは、そと指す意ありて、ぞに似たる語なり、云はゞものしがのしは、それ

道三郎の土佐日記講義には、

た土佐日記講義を指すのであらら。次に明治廿六年三月発行の石田が出て居るから、恐らく明治廿四年九月から廿五年五月までに成っのは大正二年、同四年、同十二年に出て居るが、之は小中村姓で名タ」と訳して居られる。池田博士の本文研究年表によると、池辺姓

と解釈し、語法指南に、 ・ でニ似タリ、常ニ休メ詞トイフ、サレド自ヲ意味アルナリーでニ似タリ、常ニ休メ詞トイフ、サレド自ヲ意味アルナリトし(辞)〔夫ニ通ズルナルベシ〕第二類ノ天爾波、指ス意アリテと釈してゐる。この解は、明治廿四年四月出版の言海に、

歌ノ五文字ノ句ニ「身にしあれば」ナド加フルコト常ナルガ、コ

とつどける説は、早く明治廿四年九月に成り、

といふ意味のことをいって居られる。

「もの」で切って「しが足」

同十月に出版せられ

と附記して居るのによったのであらうが、AD両説を混淆させたよ添へズシテハ、カナハヌ場合ナレバ、加フルナルベシレ、不用ノ語ナラバ、字余リニ加フルニ及ブマジ、必ズ其意義ヲ

月刊行の土佐日記講義であらうかと思ふ。のである。猪熊氏の説といふのは、研究年表によって、明治卅年九と附記して居るのによったのであらうが、AD両説を混淆させたも

られないが、それには原田氏は昭和四年二月発行の橋純一氏校註の土佐日記を引いて居

には遺憾ながら無い。

して、軽々に看過すべきではないと思ふ。絶対的のものではないが、少くとも室町時代の読み方を示すものとし」とは読まなかったらうと思はれる。三条西家本の朱点は、無論

見る説が最も穏当だらうと思ふだけで、これ以上にいふことが、私以上の三つの読み方のうちで、橘氏の「ものし」を一つの名詞と

くひてよふけぬ」(正月七日)。。。。、さかともまじれゝど、これをのみいたがり、ものをのみ、しつべきひともまじれゝど、これをのみいたがり、ものをのみ。。。。このうたを、これかれあはれがれども、ひとりもかへしせず、

山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に山田神士は、一日では、1000円であります。

には、でいるでは、手では、では、では、では、では、手では、手では、手でのがに「又やかてまいらんずるといとまか。多くの註釈書は、季吟の抄に「又やかてまいらんずるといとまか。多くの註釈書は、季吟の抄に「又やか てまいらんずるといとす。 (正月七日) このうたぬしまたまからすといひてたちぬ (正月七日)

「また」は又の義にはあらで、「まだ」の義なるべし、「まかる」

天文廿二年に某が仮名一字をも変へずに書写したものであるが、之

には「しらぬものしか」の下に朱点があって、天文頃には「しがあ

り、「す」は不の字の義なれば.濁りてよむべし。は、こゝを退き帰ることをいふにて、「まからす」は未退の義な

博士の註にもからある。 たらうか、座をはづしたまゝ帰ってしまったと解せられよう。山田 次の「まからずとてたちぬる人をまちてよまむとてもとめけるを、 来ませらといって中座したものの、夜が更けたからといふ心であっ で、まだそこらに居るのではないかと思って搜したが、歌主は、又 った人が、座にかへるのを待ってよまうといって、中座しただけ ンず」で「また来ませう」の意にとれるし、又来るといって座を起 ては、行く、来るの敬語にも使ったやうであるから、「またまから ふつもりであらうが、座をはづす時の挨拶としては如何であらう。 夜ふけぬとにやありけむ、やがていにけり」にも、よくつゞくとい は、「まだ帰るのではありません」と、座をはづす時の挨拶と見て、 たのだといふ説は、なるほどうけ難い。「まだまからず」と読むの をつけたので、使役か崇敬の意であらう。それを「まかる」を延べ る。「まからす」と清んで読むならば「まかる」の未然形に「す」 言の格也」といふ説をあげて、「この説らけがたし」と否定して居 読み、「らす」は「る」とつゞまる、即ち「まかる」の義で、 といふ意味のことをいって居る。又別に「またまからす」と清んで 「まかる」は退出の意で、貴人の前を離れることであらうが、転じ

は今の俗語にて「またきませう」といふ程の意。にして、「罷らむとす」の意、来らむとする意「またまからず」にして、「罷らむとす」の意、来らむとする意「またまからず」

はるの」にてぞねをばなく、わかす」きにてきるくくつんだる

(正月九日、船唄前半)(、おやゝまほるらん、しうとめやふらん、かへらや

て、これだけを一句に読んで居るから、読み方の助けに は なら なは「わかすゝきにてきる〳〵つんだるなを」 の上 下に 句読を うっ薄に手切る〳〵か、まほるか、まぼるかの問題である。三条西家本をどう読むか。若薄か、我が薄か、又わか薄にて切る〳〵か、わかをどう読むか。若薄か、我が薄か、又わか薄にて切る〳〵か、わか

断じ、栗田寛博士の古謡集(国文論纂一四八一頁)は「わかすゝき らう。燈自身は、稚桜、わかなすび、若瓜の例をあげて、 我すゝきにてとあるは訛也、我薄とつゞけん語勢、有べきならず、「若薄にて、かくも手をきる~~」と解し、その附録には「妙寿本、 つけて助詞と見るか、下につけて手と見るかである。従来の註解書 純一氏、山田博士は「若薄」と当てて居られる。次に「て」を上に にて」、高野辰之博士の日本歌謡史(三一頁)は「吾が薄にて」、橘 は「わかすゝきは、か字清みて、若の意とす、今年生の薄なり」と かたをば予はめでたくおぼゆるなり」と結んで居る。田中大秀の解 はんを、上における心にみられたるなり」と解説して居る通りであ 我薄とつゞく心にはあらず、薄に手きる/ 〜わがつむだる薬をとい 読んだのは、証に「わか薄を我なりと秋成ぬしはいへり、それは 言がらもみやびたるをや」と論じて居るが、「わがすゝきにて」と ぬを、吾薄といふべけんや、もとより、春ならんには若薄なるべく、 又自他をわけん事、こゝに用なし、然も、春の野につみて、我なら は「わがすゝきに手をきるをもいとはず」 と解いて 居る。 創見は も解も無く、宝永四年再版の首書本は「わがすゝき」と読み、 **麡原惺窩の妙寿院本は「我薄ニテ手ヲ剪々」と読み、抄には濁点**

る人へ」と読んで居られる。「盤も山田博士も下につけて「手切きにてきる人へ」となって居る。「盤も山田博士も下につけて「手切るから、之を問題にして居ないが、有力な証本はすべて「わかす」をにてをきる人へ」といふ本文によって居は、燈と山田博士とを除く外は、殆ど尽く「わかす」きにててをきは、燈と山田博士とを除く外は、殆ど尽く「わかす」きにててをき

東を摘んだのは「わが」といはなくても「われ」であることは分 ちうが、又春の野であれば、若薄とわざく〜ことわらなくても分ら ちっだ、ずっと効果的ではないか。又「手」と読むと意味はしっか た方が、ずっと効果的ではないか。又「手」と読むと意味はしっか た方が、ずっと効果的ではないか。又「手」と読むと意味はしっか た方が、ずっと効果的ではないか。又「手」と読むと意味はしっか た方が、それで船唄として謡はれるであらうか。「薄にて」とい なくても分ら ない「わが」として「摘む」の主語におい た方が、ずっと効果的ではないか。又「手」と読むと意味はしっか た方が、それで船唄として謡はれるであらうか。「薄にて」とい なべ、手も切ったらう、足も切ったらう。

「まほる」を、燈には「まもる」と同じ詞ではあるが「たゞめを「まほる」を、燈には「まもる」と満るのである。 「むさ」の反は「ま」だといふので、「むさぼる」の約だとする。 しいって居られる。この説では「まぼる」と濁るのである。 「むさ」の反は「す」だといふので、「むさぼる」の約だとする前がある。之も濁る方である。 又「ま」は発語か、「うまほる」と解して、 といって居られる。 この説では「まぼる」と濁るのである。 で読むのである。 「ほる」はほしがる意であるから、之は清んで読むのである。

「まほる」には他に例が見つからぬやらであるが、字津保藤原君

かくてふし給へるほどに、まうほるもの、日に橋一つ、湯水まう

、公別がある。この「まうまる」は「ままる」と呼じてあり、等で、日頃へぬ。

合で、三五五四と配したのであらう。明の「まほるらむ」も、次の「くふらむ」と同じ意味で、造句の都では、単に食ふとか飲むとかいふ意味らしい。さうすると、この船へられて居る。或は逆に、「まゐほる」(創見)又は「まきほる」といふ例がある。この「まうほる」は「まほる」を延べたものと考

りわざをして。銭ももて来ず、おのれだに来ず。まんべの、うなゐもがな、銭乞はむ。そらごとをして、おぎの菜を。親やまほるらむ、しうとめや食ふらむ。カヘラヤ。素の野にてぞ、ねをば泣く。わが薄にて、切る~~、摘んだス以上を綜合して、この船唄全部を、から読んではどうかと思ふ。

するので、解釈に無理ができるのではないかと思ふのである。 大四大、八九、四、四六五、七九、七七と読むので いったのではないか。 「かへらや」に 「帰らむや」の意味があるとしても、ではないか。 「かへらや」と難していて居たのを、 貴之が略したのではないかと思ふのである。 三条西家本は、「かへらや」を上につけて、 六節に読んで居るから、 11つと見てよいと思ふ。 前半と後半とを関係づけようと 大の笑ふを聞きて、 海は荒るれども、 心はすこしなぎぬ」と書いて おっぱいかと思ふのである。

傍点の所は、抄に「ことはことなる」とあるのに従ったか、多くもろこしとこのくにとはことことなるものなれど(一月廿日)

語などはちがへど」と解して居るのが、最も穏当ではないかと思ふ ないが、「こと、ことなる」即ち「言、異なる」と読んで、「人の言 とやうなれど」といふ異文を校合して居るのに引かれたのかも知れ ナル」とあり、抄に「ことはことなる」とあり、自分も「ことばこ て、一語とは思はれない書き方である。考証が、妙寿院本に「言殊 の「こと」は共に合字で、殊に前者は下の「こと」が少し離れて居 んだとはいへない。なほ青谿屋本、三条西家本の複製で見ると、上 ひて」と書いて居るから、必ずしも定家が「ことこと」を一語に読 の証本が「ふなうたうたひて」と書いて居る所を、「ふなうたく~ となって居るから、貫之自筆本も恐らくさうだったらう。定家は他 / 〜 なる」と写してゐる外、有力な証本はすべて「ことことなる」 ところん〜、ほと〜〜、まに〜〜など書いて居るから、一語ならば とんく、いろくく、きるくく、うらくく、ころろんく、しばくく、 たりしよう。事々や事毎は取上げるに足らない。青谿書屋本は、ひ 氏の当てられた異々は、まち~~、別々といふ意味で、この方がぴっ ら、之は「かはってるる」といふ意味で当てられたのであらう。橘 も山田博士は「ほか」といふ意味の場合には他の字を当てられるか 之は一ほかの事」といふ意に解せられて、こゝには穏かでない。尤 異事、事々、異々、事毎がある。山田博士は異事を当てられたが、 て居ない。これを「ことごとなる」と濁って読むと、当てる漢字は の註釈書は「言葉異なる」又は「言は異なる」と解して、問題とし 一こと~~なる」と書きさらなものである。こゝは定家本に「こと

て、あやしきことうたをぞよめる (正月廿二日) このわらは、ふねをこぐまに~~、やまも ゆく とみ ゆる をみ

を高の部分を、山田博士は「怪しき異歌をぞ詠める」と読んで居られる。こと人、ことひと人、ことものども、ことゞまり等にはられる。こと人、ことひと人、ことものども、ことゞまり等にはられる。ことであれたので、「あやしき」は歌にかゝる修飾語になって居る。にとられたので、「あやしき」は歌にかゝる修飾語になって居る。にとられたので、「あやしき」は歌にかゝる修飾語になって居る。にとられたのである。次に 妙寿 院本 には「怪言哥ヲソヨメル」と漢字を当て、抄は之を採って「言歌とはたゞごとうたなどいふやらに、かざる事なく、ありのまゝによめる事なるべし」と解しるやらに、かざる事なく、ありのまゝによめる事なるべし」と解しるるべけれど、それは語をなさず」といって居る。真淵があやしきことにて、句をきるべし、漢文の例、物語などに多し、九歳ばかりなるわらはの、そのとしごろよりはをさなきらまれのものが歌をよみたるは、あやしき事かなと、詞をあやにいへるなんなるべけれど、それは語をなさず」といって居る。真淵があやしきことにて、句をきるべし、漢文の例、物語などに多し、出版はかりなるわらはの、そのとしごろよりはをさなきらまれのものが歌をよみたるは、あやしき事かなと、詞をあやにいへるなんなるがありなるわらはの、そのとしごろよりはをさないる。

よみ出でたると也」といひ、解にはまるといふ心にみるべし」といひ、創見も「怪しき事かな、歌をぞめるといふ心にみるべし」といひ、創見も「怪しき事かな、歌をぞといいな一句をはさみてかゝれたるなり、あやしきことには歌をぞよないふ心にみるべし」といひ、創見も「怪しき事かな、歌をぞよみ出でたると也」といひ、解には

言なりといはれき、こゝもしかなり、哉字を加て心得べし、あや藤井氏云、云々ことと云さしたるやうなるは、歎息の意を含たる

由なり、常は才覚無みゆる者の歌よみしを、いたく驚めでたる

といって居る。

に、みふねすみやかにこがしめたまへと、まうしてたてまつるかぢとりのまうしてたてまつることは、 このぬ さの ちる かた

(正月廿六日)

あるを知らない。というは日本古典全書本に「言葉」と当ててある外、異説とである。こゝは日本古典全書本に「言葉」と当ててある外、異説べし」とある通りであらう。片本は片仮名本の略で、妙寿院本のこのり申す詞にはとの心なり、ことゝは片本に言とかける字の心なるとある。燈の「ことは」の註に「かぢとりがぬさ率るとて、神にい

りけれ (正月廿六日) おひかぜのふきぬるときはゆくふねのほてうちてこそうれしか

といふ歌について、創見には「られしかり」の「かり」は濁りて唱

も」とあるのに従って、「られしがりけれ」と濁って読んだので、ふべ しと いっ て居る。 併し景樹は、定家本系統の抄に「ゆくふね

といって居るが、「行く舟も」は定家のみの誤写で、「の」の方がるに心のつかざるより、解きわづらひて、のに直したるもの也妙寿本、六帖に行く舟のとあるは訛也(中略)こは嬉しがりと濁

本文を「ゆく舟も」として居るが、を景樹の定説と見ることは、控へるべきである。燈は抄に従って、正しいことを知らなかったから、反対に「の」を訛と見たので、立

同つきなれば、猶「の」もじのかたにしたがふべくやいけれ」とよむべし、しかれどもあまりにひなびたるよう、「も」じに従はゞ、下の「られしかりけれ」の「か」もじ清せの「の」にて、ゆく舟の帆手らつごとく、舟中の人々、手を拍せの「の」にて、ゆく舟の帆手らつごとく、舟中の人々、手を拍せの「の」にに従はゞ、下の「られしかりけれ」の「か」もじ清し、「も」じに従はゞ、下の「られしかりけれ」の「か」もじ清し、「も」じに従はゞ、舟中の人々の手を拍てよろこぶのみならず、舟までもたがはゞ、舟中の人々の手を拍てよろこぶのみならず、舟までもし、「ゆく舟も」を「の」とある本、その意大に異なり、「も」にし「ゆく舟も」を「の」とある本、その意大に異なり、「も」にし

は、共に古人の説と全然反対である。「ゆく舟の」に従って「うれしがりけれ」と濁って居られるのと「ゆく舟の」に従って「うれしがりけれ」と清 んで居ら れる のと、萩谷氏がといって居るのは、穏健な説である。橋氏が定家本に従って「行くといって居るのは、穏健な説である。橋氏が定家本に従って「行く

かくいひつょくるほどに (二月五日)

山田博士は「かく言ひ続くる程に」と読んで居られるが、これは

土の本に 「かく言ひつゝ来る程に」と読むべきではないか。 類例は、

かく言ひて眺めつゝ来る間に (三三/九)

かく言ひつゝ漕ぎ行く (二七ノ五)

かく歌ふを聞きつゝ漕ぎ来るに

かく言ひつく行くに(ニニノー〇)

受けたものの中には などがあって、何れも歌か詞かの次に来る句である。なほ「と」で

青谿書屋本の存在して居る為である。

とが明かにされて居る。貫之自筆本のほゞ完全に再建されたのは、

であり、青谿書屋本は又、為家本の単なる転写本ではなく、複製本 が、仮名の字形、和歌の書き様等、すべて原本のまゝを損したもの したものを、更に転写したものである。為家本は今所在不明である

青谿書屋本は、嘉禎二年に為家が貫之自筆太を一字を違へず書写

とも云ふべき程に、忠実かつ厳密な態度で書写されたものであるこ

と言ひつゝなん (一四ノ一二)

五日の条のも、「つ」」を助詞と見る方が穏かであらら。 のやうに、下の「来る」や「行く」の略されたものさへある。二月

こゝろもとなさにあけぬからふねをひきつゝのぼれども、 かは

なさの中に夜はあけて、九日になった、人々は船から下りて、から ひき舟にしたる成べし、さればかろくせんとて、よの舟へものりら ふねは虚舟也、人乗ぬふね也」と註し、首書本は更に「水あさくて 妙寿院本は「明ヌ虚舟ヲ引ツヽ」と読み、抄も之にならって「から つりたるべし」と想像を加へて居る。さう読まうとすると、心もと 傍点の所は、普通「朗けぬから、船を牽きつゝ」と読んでゐるが、 のみづなければ、ゐざりにのみぞゐざる (二月九日)

> 名と見て挙げて居られないが、九十二頁にあるのと比べると、漢字 十四字であるのに対して、青谿書屋本は僅か二十四字である。 貫之自筆本もさらであったらら。試に、最初の十分の一、真中の十 る。但し院は七十八頁に二度出て居るし、九十頁の「千とせ」を仮 本中の漢字は、日附を除くと、二十一語、三十三字、三十九回であ 分の一、最終の十分の一を取って、その中に使用してある漢字を数 と見なければなるまい。従って二十二語、三十四字、四十一回とな 定家本は漢字が二百四字、三条西家本は百四十九字、図書寮本は五 へてみる。但し日附はすべて漢字であるから、こゝには数へない。 池田博士の平仮名字体統計表の附録の漢字表によると、青谿書屋 青谿書屋本は漢字を使用することの非常に少い本である。従って

や入江昌憲によって正しく読みなほされた。それから「あけぬ」で 乗った様子もない。その後、考証の標註に見えるのであるが、契沖 りた様子も、他の船に乗りらつった様子も、徒歩した様子も、車に 舟にして引きつゝのぼった意となるが、その前後の文に、舟から下 **ら。後のものだが、源氏玉葛、浮舟に例がある。「五色にいまひと** を「をのこら」と読む人もあるが、「ららとう」と読むべきであら 院、故、中将、相応寺の十語は、必ず音読すべきものである。郎等 いろぞたらぬ」(二月一日)は、単に五種の色をいふのではない、 漢字の二十二語のうち、日記、 講師、白散、宇多、明神、

550

句とする人は無い。

大体音読すべきではなからうか。 「一文字をだにしらぬものしが、あしは十文字にふみてぞあそぶ」 「一文字をだにしらぬものしが、あしは十文字になく、一といる文字、十といふ文字の意であるから、必ず音読すべきである。 は「いづみのくにまでとたひらかに願たつ」(十二月廿二日)「おばろげの願によりてにやあらん」(正月廿一日)の二つとも、神仏ばろげの願によりてにやあらん」(正月廿一日)の二つとも、神仏ばろげの願によりてにやあらん」(正月廿一日)の二つとも、神仏ばろげの願によりてにやあらん」(正月廿一日)の二つとも、神仏ばろげの願によりてにやあらん」(正月廿一日)の二つとも、神仏ばろげの願によりてにやあらん」(正月廿一日)の二つとも、神仏ばるげい願によりてにやあるから、当然 音読すべきである。願事黄赤白黒の五色を指す語であるから、当然 音読すべきで 書い た詞 すべきである。 しま 大体音読すべきではなからうか。

い。写した人も、京と「みやこ」とを、意識して書き分けたのでは出て来るが、之に都を当てた本はあるが、京を当てた本は一本も無て居る、「みやこ」と書いたのは一本も無い。「みやこ」は十一回な十二回出て来るが、他の六本も、すべて十二回とも京と書い

ぼこり」は俗諺のやうなものであるから、「きやう」と変へることあらう。「日をのぞめばみやことほし」は詩の句であり、「みやここんだのは一首も無い。やはり「きやう」が歌語でなかったからであらう。「みやこ」と歌に詠みこんだのは五首あるが、京と詠み佐日記の散文の中の京を、同様に「みやこ」と読めといふのは無理佐日記の散文の中の京を、同様に「みやこ」と読めといふのは無理佐日記の散文の中の京を、同様に「みやこ」と読めたがからといって、土ちであらう。「日をのぞめばみやこ」と読むのが十八首ほどあるが、万葉集の歌には、京を「みやこ」と読むのが十八首ほどあるが、万葉集の歌には、京を「みやこ」と読むのが十八首ほどあるが、

くなりぬといふことをよろこびて」(二月六日)「けふはみやこの 廿九日)とは一同のことである。 十一日)と「むつきなれば、京のねのひのこといひいでゝ」 もをんなも、いかでとく京へもがなとおもふこゝろあれば」 らはのよめるろた」(二月五日)は他の人のことであり、 の残りの三回のうち、 くまで帰り、又京都に帰り斎いた時に使ったのだともいへよう。京 都又は帝都の方の意、京は京都のことで、感情の高まった時や、近 けて京とばかり書いて居る。これだけの例ならば、「みやこ」は帝 ると、三回とも京と書き、いよく〜山崎に着いてからは、六回つゞ ことで誰彼なしの場合に使はれて居る。それが死んだ子のことにな みぞおもひやらるゝ」(元日)のやうに、他の人のことか、一同 はできない。残りの四つは「あはぢのしまのおほいこ、みやこち 「京のちかづくよろこびのあまりに、 ーをと あるわ

本はこの三つの為に、貫之が京と「みやこ」とを書き分けた標準 を立てることが出来ない。けれども五色、一文字、十文字、願のや うに、訓読もできる詞を漢字で書いて居るのであるから、この京も、 う」と音読する例は、伊勢物語以下、後のものには多い。 号後に「けふせちみすれば、いを不用」(二月八日)は、音読し 一人のものには多い。 と音読する例は、伊勢物語以下、後のものには多い。 と音に通じるであらうが、こゝは「もちゐず」と読むのが穏当で でも意は通じるであらうが、こゝは「もちゐず」と読むのが穏当で と言に正してあららが、こゝは「もちゐず」と読むのが穏当で ないたのではないか。

| 関西大学講師 | (昭和廿六九十八稿)